

こころと「神秘世界」

鎌田東二 Toji Kamata
(こころの未来研究センター教授)

福来友吉・柳宗悦・宮沢賢治の「心理学」的探究

に深く共感しつつも、それぞれ普遍的で根源的な人間の心の潜在能力の目覚めを確信し、自ら実践的にそれを探究した。そして、福来は財団法人日本心霊研究所を、柳は日本民藝館を、宮沢は羅須地人協会を設立して、独自の精神世界探究を試みたのである。その3人の心理学的探究の内実を考察することで、「こころの未来」と「未来のこころ」の在り処や可能性について探ってみるのがこのセミナーのテーマであったが、ここでは紙幅の限りもあるので、福来友吉の探究について報告してみる。

さて、日本人として最初の東京帝国大学理科大学物理学教授となり、2度目の東京帝国大学総長を務めていた山川健次郎は、大正3年(1914)8月19日、第6代京都帝国大学総長に就任し、翌大正4年6月14日まで2つの帝国大学の総長を兼務することになった。この会津白虎隊の生き残りであった物理学者は長岡半太郎らを育てた教育者で、アメリカ留学時に船中で日本人として初めてカレーライスを食べ、現在の京都大学の「総長カレー」の先達となった人物でもあるが、「千里眼事件」においては、「千里眼」(透視)や「念写」にはきわめて懐疑的で、それを批判する立場をとった。

その「千里眼=透視」や「念写」なるものを大真面目に精神物理学=実験心理学として物理的に証明しようと取り組んでいたのが、東京帝国大学文科大学助教授の福来友吉であった。千里眼=透視実験とは肉眼で見ることなしにその存在を言い当てる実験であり、念写実験とは厳重に隔離された写真の乾板に特殊能力を持つ被験者が抱いたイメージを焼き付

ける実験で、特殊能力を持つ御船千鶴子や長尾郁子を被験者として実験を試みた。福来は同大学の初代心理学教授元良勇次郎の愛弟子であったが、この「千里眼事件」により東京帝国大学助教授の職を辞職せざるを得なくなったのである。

元良勇次郎は明治23年から大正元年まで東京帝国大学教授を務め、在職中に没したため、後継者と目していた愛弟子を護ることができずに世を去った。大正2年に休職し同4年に辞職した福来の後を受けて東京帝国大学の心理学教授に就任したのが松本亦太郎で、松本は大正2年から大正15年まで教授を務め、日本心理学会の初代会長にも就任することになる。歴史にifは無意味であるが、もし福来が東京帝国大学の心理学教授となり、日本心理学会の初代の会長に就任していたとしたら、日本の心理学は超心理学やトランスパーソナル心理学や宗教心理学の先進国となっていただろうと想像せずにはいられない。

その福来友吉は、明治2年(1869)に岐阜県高山に生まれ、明治32年(1899)に東京帝国大学を卒業後、大学院に進み、元良勇次郎の下で心理学を学んで、明治39年(1906)、『催眠の心理学的研究』により文学博士の称号を受け、明治41年(1908)に東京帝国大学助教授に就任し、元良の後継者と目されていた。

しかし、明治43年(1910)、福来は京都帝国大学医科大学精神病学教室の今村新吉博士(後に教授となる)とともに透視(千里眼)公開実験を行い、山川健次郎や藤教篤らにその真偽のほどを疑われ、翌明治44年に行った念写実験では藤に手品と批判されたことがきっかけで、休職・辞職に追い込まれたのだった。その後、福来は高野山宝城院で真言密教の修行に励み、大正15年(1926)には高野山大学教授に就任、昭和3年

(1928)には財団法人日本心霊研究所所長となり、同年9月にロンドンで行われた国際心霊学大会に出席し、念写の研究発表をしている。昭和15年(1940)には高野山大学教授を辞職し、心霊研究に集中した。戦後は、東北心霊科学研究会顧問に就任したが、昭和27年(1952)82歳で没した。著作には、『心理学精義』(明治35年)『催眠心理学概論』(明治38年)『催眠心理学』(明治39年)『心理学講義』(明治40年)『教育心理学講義』(明治41年)『心理学教科書』(明治42年)『透視と念写』(大正2年)『心理学審義』(大正3年)『心霊の現象』(大正5年)『生命主義の信仰』(大正12年)『観念は生物なり』(大正14年)『精神統一の心理』(大正15年)『心霊と神秘世界』(昭和7年)などがある。

福来は、精神物理学(実験心理学)からウィリアム・ジェームズの心理学への共感を経て催眠研究へ分け入り、そこからさらに透視(千里眼)・念写研究・心霊研究へと参入していったのである。透視や念写の研究に入る前に著した『心理学講義』は、ウィリアム・ジェームズと元良勇次郎の影響下、「緒論・精神の機関・連合・本能・習慣・類化と応化・注意・感覚・観念・認識・推理・情念・欲念・精神と身体との関係」の15章で構成され、「附録」として「苦悶と救済と無我」「聖者を論ず」「幻覚的神」「聖者の見魔」「催眠術の原理及実験」が論述されている。

「第十五章 精神と身体との関係」では、丹田や白隠や白隠の師の白幽子に言及して、「白隠禪師は、当時白河の山深き所に住せる白幽先生の許を訪ひ、是に初めて回生の妙法を得たり。回生の妙法とは結局精心を丹田に凝らして、無念無想の境に入ることに外ならず」と述べ、「附録 其の三 幻覚的神」においては宗教的経験が「実在の感得」であることを

指摘し、「宗教的経験は厚生(厚生の)経験なり生命なき所に生命を得るの経験なり」「宗教的実在は無我を以て感すべきものなり無分別智を以て証すべきものなり」と主張し、「日本的靈性」が「無分別智」であると説いた鈴木大拙にも通じる見解を示している。

また、同書の「附録 其の四 聖者の見魔」には、釈迦成道時の「魔王」の解脱妨害の出来事について言及され、「精神の分裂」や「複重人格」などの視点からの考察が例えば「第二人格の悪魔として現出」などとして「精神病者の悪性第二人格」と比較され、さらには、「止観」(座禅・瞑想)の修行中に現れる「悪魔」について、



福来友吉



山川健次郎

(提供: 京都大学大学文書館)

「悪魔の大部分は、旧来の悪心悪念の悪性第二人格となりて現出せるものと推断して差支えなきが如し」と考察しているのである。

福来は、このころ宗教新聞の「中外日報」紙上で、「面白い心」として、「センチメンタル・ポジビリティ」あるいは「メンタル・ポジビリティ」について触れ、具体的には「千里眼」と「根本識」(識原)を取り上げ、「精神現象固有の研究法によりて出来たる心理学は科学者の定義する科学にならぬであらうけれども、それは精神其物の本性より生ずる結果で、已むを得ざることである」とか「超個人的なる精神原理の存在」と主張している。こうして福来は、千里眼=透視や念写の研究から心霊研究や神通力や念力の研究に向かい、終には「霊の存在とその活動」について論じるに至るのである。

福来が千里眼や念写研究に没頭した明治43年は、ハレー彗星が地球に接近し、それにより地球も人類も滅亡するという流言が広まり、パニックが起こった時代であった。わたしはそれを「ハレー彗星インパクト」と名づけて、地球史的・文明史的ターニングポイントであると考えているが、西田幾多郎が倫理学担当の教官として京都帝国大学文科大学助教授に就任したのが明治43年8月31日で、西田は翌明治44年1月に満を持して『善の研究』を出版し、ウィリアム・ジェームズやヤコブ・ペーメに言及しながら、「純粹経験」の問題を考察した。その問題意識は福来の試みを含め、同時代の新思潮心理学の探究課題と確実に連動していたのである。

関連文献

鎌田東二『神界のフィールドワーク——霊学と民俗学の生成』青弓社、1985年
鎌田東二「柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術」『Genesis第12号』京都造形芸術大学、2008年10月刊
鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年